

国立民族学博物館の収藏品①9

ラム島の椅子

民博のアフリカ研究の課題と見通し



ラム島で収集された謁見用の椅子
(キティ・チャ・エンズィ、標本資料番号H7275)

とはいえ、公の誌面ではやいているわけではない。その解決にむけては、館員一同が努めている。その努力の一環として、平成二十九年年度から、アフリカ地域がフォーラム型情報ミュージアム研究プロジェクトの重点地域として認められた。このプロジェクトは、民博に所蔵された研究資料についての議論をとおして国際的な共同研究を進めるといふもので、資料情報だけでなく研究ネットワークの継承にもつながる。本館のアフリカ研究の今後に期待していただきたい。

(飯田卓)

ケニアといえば、大型野生動物の住まうサバンナ景観をまず連想することが多いかもしれないが、南東部の海岸地帯には、北のソマリアや南のタンザニア、モザンビークにまで連なるスワヒリ文化が栄えている。スワヒリ文化とは、アフリカ大陸に根ざしながら、インド洋のあなたにある西アジアや南アジアからも影響を受けてきた地域の文化のことだ。「スワヒリ」という言葉がそもそも、アラビア語のサーヒル（岸辺の意）に由来する。ヨーロッパ列強の帝国主義がアフリカ大陸を蝕む直前（十九世紀前半）には、隣国タンザニアのザンジバル島にオマーン王国の王宮が置かれるほど、スワヒリ文化圏とアジアの結びつきは強かった。

この椅子を収集したのは、本館の名誉教授 和田正平氏である。本館の展示場が一般公開される前年の一九七六年のことで、以来、一時的に展示場から移動されたことはあるものの、現在も展示場に置かれている。収集のことについて触れたので、以下では、本館の資料収集と研究の関係について述べておきたい。本館の研究対象は人間の営みたる文化全般に及んでおり、物質文化だけにかぎらないが、物質文化研究は今なお文化研究の基礎として重要な意義をもつ。そして、その研究をさらに基礎づけるために、物質文化の収集は不可欠である。ただし、われわれアフリカ展示担当者（＝アフリカ収集担当者）には慢性的な悩みがある。アフリカ大陸が広大で、きわめて多様な文化的背景を有するのに対し、われわれは実質的に四名で担当しなければならないということだ。

とはいえ、必ずしも人数だけが問題ではない。わたしが今回ラム島の椅子を紹介したのは、マダガスカルを担当する関係で東アフリカ島嶼部も受けてもっているためだが、このように専門があるていど重なってれば、和田名誉教授の仕事があるていど追跡できる。